

Program

FINLAND FILM FESTIVAL IN JAPAN フィンランド映画祭 2026
上映タイムスケジュール

	16:30	19:00
10.17 sat	大統領の誘拐 (87分) ①上映後、ヨン・ルンドステン プロデューサー Q&A	18:45 リス (93分) ①上映後、マーク・ルオフ プロデューサー Q&A
10.18 sun	みんなに伝えて (112分)	18:50 アンシ・カシトンニの世界 (74分)
10.19 mon	父の日 (99分)	大統領の誘拐 (87分)
10.20 tue	みんなに伝えて (112分)	アンシ・カシトンニの世界 (74分)
10.21 wed	リス (93分)	父の日 (99分)
10.22 thu	アンシ・カシトンニの世界 (74分)	リス (93分)
10.23 fri	大統領の誘拐 (87分)	18:45 みんなに伝えて (112分)

*入場料金 1500円均一[税込] 全席指定・各回入替制

*全作品日本語字幕

*各作品の座席指定券の発売開始は〇月〇日(〇)よりユーロスペース劇場窓口および公式HP(www.eurospace.co.jp)にて販売開始

■各種サービスの適用はありません。■公式HPでは各種クレジットカードでのみ購入が可能です。■Q&Aは変更・中止となる場合がございます。

 @finlandfilmfes  @finlandfilmfestival

FINLAND FILM FESTIVAL IN JAPAN

フィンランド映画祭
2026

2026年10月17日[土]-23日[金]

ユーロスペース 東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F

料金 1,500円均一[税込] 全席指定・各回入替制

劇場 HP > <http://www.eurospace.co.jp> 公式 SNS >  

主催 | フィンランド・フィルム・ファンデーション 特別後援 | フィンランド大使館、フィンランドセンター
協力 | 有限会社ユーロスペース、日本映像翻訳アカデミー株式会社

ユーロスペース

渋谷駅徒歩8分/渋谷Bunkamura前交差点左折
東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F
TEL:03-3461-0211

劇場への行き方

- 「渋谷駅ハチ公前」→「109」の右側の文化村通り→(約3分)→
「東急本店」向かって左側の道を進む→「Bunkamura前交差点
(松濤郵便局前)」を左折→60m先右側
- 「渋谷駅」→「マークシティ内通路」を通り抜け→「道玄坂上交番前」
信号を渡り→「セブンイレブン」の左側の道を下る→150m先左側



ドキュメンタリー

アンシ・カシトンニの世界

Anssi Kasitonnin maailma /
8000 : An Art Odyssey

74分／ 2025年／カラー／デジタル上映

製 作：サミ・サンパッキラ
監 督：サミ・サンパッキラ
脚 本：サミ・サンパッキラ
音 楽：アンシ・カシトンニ
出 演：アンシ・カシトンニ
製作国：フィンランド
言 語：フィンランド語、フランス語



アートの世界を
ユーモアたっぷりに描く
異色ドキュメンタリー

フィンランドの現代芸術家アンシ・カシトンニの創作活動を追った本作は、何でも自分独自のやり方や手作業（DIYスタイル）でとことん突き詰めていく彼の姿を温かくユーモラスに描く。ヘルシンキでの大規模展覧会の準備、オスカー獲得を目指したフランス語の短編映画制作、香港の企業との玩具開発といった、情熱と型破りな創造性に満ちた彼の泥臭い日常を克明に記録する。さらに本作ではカシトンニ自身が音楽を担当している。実はサンパッキラ監督とカシトンニは日本とも深い繋がりがある。1975年生まれのサンパッキラ監督はマルチ・アーティストとしても精力的に活動し、2012年に東京の「エスパス ルイ・ヴィトン東京」で映像作品を発表した輝かしい実績を持つ。また、1978年生まれのカシトンニは日本発の国際自動車映画祭「International Auto Film Festa 2025」にて受賞歴を誇る。彼の作品はフィンランド国立美術館のコレクションに所蔵されるなど、国内外を問わず、まさに世界が注目する気鋭のアーティストである。

コメディ

大統領の誘拐

Presidentin kyyditys /
The Kidnapping of a President

87分／ 2026年／カラー／デジタル上映

監 督：サムリ・ヴァルカマ
脚 本：ヨン・ルンドステン
サムリ・ヴァルカマ
出 演：ユッシ・ヴァタネン、
アク・シボラ、エリアス・サロネン
ペルッティ・スヴェホルム
製作国：フィンランド、チェコ、
オランダ、エストニア
言 語：フィンランド語



大統領誘拐事件を
不条理なドタバタ劇で描く
歴史風刺コメディ

1930年に起きた初代大統領の拉致という史実をもとに、政治的な混乱をコミカルに映像化した作品。酒に酔った軍の幹部らは退任したストールベリ大統領の誘拐を計画する。いざ実行に移すも、気の強い大統領夫人が無理やり誘拐犯の車に乗り込んだことで事態は一変し、予測不可能な珍道中が始まる。本作は2026年1月のロッテルダム国際映画祭で世界初上映を飾り、9月にフィンランドで劇場公開される。監督のサムリ・ヴァルカマは1974年生まれ、コメディを得意とする映画監督であり絵本作家でもある。彼の絵本『カイサのふうせんガム大さくせん』は日本でもその邦訳が出版されている。主演のユッシ・ヴァタネンは1978年生まれ。実力派俳優として知られ、出演作『アンノウン・ソルジャー 英雄なき戦場』は2019年に日本で劇場公開。フィンランド映画祭2021にて『フォレスト・ジャイアント』が上映されたほか、2023年にはアキ・カウリスマキ監督の『枯れ葉』が同映画祭にてオープニングを飾り、その後劇場公開され大ヒットを記録した。

歴史ドラマ

みんなに伝えて

Kerro kaikille / Tell Everyone

112分／ 2026年／カラー／デジタル上映

監 督：アッリ・ハーパサロ
脚 本：カティヤ・カッリオ
主 演：マルケッタ・ティッカネン
クリスタ・コソネン
アーム・ミロノフ
アルマ・ポウスティ
製作国：フィンランド
言 語：フィンランド語



かつて実在した隔離施設を舞台に
繰り広げられるサバイバルドラマ

1898年のフィンランド。貧しい身分に抗い自由を求め放浪したアマンダは、社会規範を破った罰として最果てのセイリ島にある精神療養所へ送られる。彼女は一切の自由を奪われた極限状況で他の女性たちと深い絆を結び、過酷な現実とともに生き抜く希望を見出していく。実在するこの島は、かつて社会に適応しない女性を監禁し隔離した、歴史の闇を象徴する場所。カティヤ・カッリオの史実に基づく小説を原作にした映画。2026年1月にヨーテボリ国際映画祭で世界初上映、同年10月に本国フィンランドで劇場公開。女性監督アッリ・ハーパサロは米ニューヨーク大学等で映画制作を学び、女性の心理を繊細に捉える演出で評価される。前作『ガール・ピクチャー』（2022）はフィンランド映画祭2022での上映後に全国劇場公開された。主演のマルケッタ・ティッカネンは『アンノウン・ソルジャー 英雄なき戦場』に出演。共演のクリスタ・コソネン、アーム・ミロノフ、そして『枯れ葉』の好演で広く知られるアルマ・ポウスティら実力派陣は、同映画祭の上映作を通じ映画ファンに親しまれている。

SFコメディ

リス

Orava / The Squirrel

93分／ 2026年／カラー／デジタル上映

監 督：マルクス・レムスルス
脚 本：マルクス・レムスルス
主 演：ミロ・ロツペリ
ミモサ・ヴィッラモ
ハンヌ＝ベッカ・ビョークマン
製作国：フィンランド、ドイツ、
オランダ、スウェーデン
言 語：フィンランド語



自然の喪失と管理社会を風刺する
SFロマンス

自然が消え人工動物に囲まれた世界でロボットペットデザイナーのパンが、偶然見つけた地球最後の本物のリスを守るため社会の規則に背く中で、そのリスが鬱になり自身は衛生検査官のエミリアと恋に落ちていくという、フィンランドとドイツ等の国際共同製作によるSFロマンスコメディ。2026年4月に本国で劇場公開され、管理社会での人間の幸福をコミカルに問いかける作風が評価された。脚本および監督のマルクス・レムスルスは1983年生まれ、アールト大学卒業後にTVドラマ等を経て、フィンランド映画年間興行収入1位の大ヒットを記録した『Risto Rappääjä ja pullistelija』で商業長編デビューし、本作が長編第2作目となる。主演は映画『ホール・イン・ザ・グラウンド』（2019）やフィンランド映画祭2025上映作『バタフライ』に出演したミロ・ロツペリ。ヒロインのエミリア役には、同映画祭2019で上映された主演作『アウロラ』でユッシ賞を受賞したミモサ・ヴィッラモ。独特なユーモア溢れる話題の注目作。

ドラマ

父の日

Isänpäivä / Father's Day

99分／ 2026年／カラー／デジタル上映

監 督：アレクシ・サルメンペラ
脚 本：アレクシ・サルメンペラ
主 演：トンミ・コルペラ
トミ・リンドフォース
ラウラ・ビルン
製作国：フィンランド
言 語：フィンランド語



人生の厳しさと挑戦を
ユーモア交えて描く
人間味あふれるトラジコメディ

カリスマロックバンドのグルーピーだった女性の10代の双子の娘が父親を探す旅に出る。たどり着いた先には、酒に溺れケアホームで暮らす男性ティンケがいた。彼は深刻な問題を抱え、親友ヴェイッコの支えとブラックユーモアで現実を笑い飛ばし生きている。双子の姉妹との交流を通じティンケの過去が次第に明かされ、人間の抱える弱さや強さ、人間らしさが浮き彫りになっていく。依存症という重いテーマを施設の現実と共に描いた本作は、海外の映画評で絶賛された。フィンランドでは2026年3月に劇場公開。監督のアレクシ・サルメンペラ（1973年生まれ）はユッシ賞を複数回受賞した実績を持つ。ヴェイッコ役のトンミ・コルペラと母親役のラウラ・ビルンは監督の『ヴォイド』（2019）でも共演、フィンランド映画祭でも上映された。今回ティンケ役に抜擢されたのは、演技経験のない、実際の生活支援施設で暮らすトミ・リンドフォース。トンミ・コルペラの実際の友人である彼の、飾らない佇まいと独特のユーモアが作品に温かいリアリティをもたらしている。